



2. 中谷卯三郎と中谷家の人びと

曾祖父・卯三郎は石工として、またキリスト教徒として、今治の地域発展に大きな足跡を残した


中谷稔氏の曾祖父にあたる中谷卯三郎は、今治教会の創業者7名  のうちのひとりである。今治教会は1879年に設立され、中国・四国地方でもっとも早く設立された、由緒あるプロテスタント系教会である。卯三郎を含む創業者には、ある共通点がある。大工や鍛冶屋、米屋など商工業に従事していた人がほとんどで、卯三郎も石工を生業にしていた。中谷家の先祖は、1600年に宇和島より伊予国府20万石に転じた藤堂高虎が今治城  を築城する際に河内長野から連れてきた石工で、代々職人の家系であった。中谷氏提供の「中谷家系図」によると、もっとも古い記録で、1743年没の中谷與兵衛の名前が記されている。そして、卯三郎は1904年逝去とある。



今治教会の創業者



後列右 渡邊福治・大倉治右衛門・蜂谷徳三郎
前列同 八木治作・矢野萬助・中谷卯三郎・眞鍋定造

（写真：日本キリスト教団今治教会「今治基督教会沿革小史」より）

明治初期のキリスト教と商工業者との深い関係は、今治に限ったことではない。たとえば、今治教会とゆかりのある新島襄  出身の群馬では、おなじプロテスタント系教派に属する1878年設立の安中教会や1884年設立の甘楽教会などでは、多くの蚕糸業者や製糸業者が関係し、地域の発展に貢献した。このように、明治初期のキリスト教で商工業に従事していた事例は多くある。

卯三郎がキリスト教に関心をもつに至った経緯については定かでないが、中谷氏はつぎのようなことを話してくれた。「卯三郎は石工仲間の元締めをやっていて、蒼社川の橋をつくったときに台風で川に流され壊れてしまった。ひょっとしたら、これがきっかけだったかもしれない。昔の時代だからそういう記録が残っていないんですけど、そんな話を昔聞いたような記憶がありますね。」

卯三郎には、妻タキヨとの間に6人の娘（長女ひさ、次女雪枝^{ゆきえ}、三女末^{すえ}、四女梅代^{うめよ}、五女まりえ、六女直^{なお}）がおり、1歳で亡くなったまりえを除いて、いずれもキリスト教徒であった。四女の梅代は、中谷氏の祖母にあたる。三女の末は阿部平助の実弟・光之助の長男の陽太郎と結婚し、六女の直は阿部平助の長男で阿部(株)の二代目社長の秀太郎に嫁ぎ、同社三代目社長となる和男をもうけている。つまり、中谷家と阿部家は親戚関係にある。

卯三郎は、キリスト教徒でたくさんの女の子に恵まれたこともあって、女子教育には早くから熱心にとり組んだ。明治初期に来日したキリスト教宣教師たちは、社会的に身分の低かった女性に対して女学校を設立し、女性たちにも教育を受ける機会を与えた。たとえば、今治の女性の多くが学んだ神戸女学院（現・神戸女学院大学）やフェリス和英女学校  （現・フェリス女学院大学）、東洋英和女学校  （現・東洋英和女学院大学）など全国に点在した。神戸女学院は、1873年にアメリカから来日したプロテスタント（会衆派）の女性宣教師・E.タルカットとJ.E.ダッドレーが神戸に開いた私塾「デイ・スクール」を前身とし、1875年に「神戸ホーム」、1894年に神戸女学院と改称し、キリスト教精神にもとづいた女子


教育を施した。

キリスト教宣教師たちによる女子教育とは別に、国の近代における女子中等教育の整備は、1891年の「中学校令改正」による女子中等教育規定の設置、ついで1895年の「高等女学校規定」公布、1899年の「高等女学校令」公布をもって完成した。このような国の動きを受けて愛媛県では、1898年に「高等女学校補助規程」が制定され、この補助のもとで今治でも高等女学校の設立に向けて動き出した。そして、1899年に町立今治高等女学校（愛媛県立今治北高等学校の前身）が設立された。同校の創設に卯三郎が係わり、開校式では来賓として祝辞を述べている（愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念通史編集委員会編〔1999〕6頁）。今治における女子教育が他の地域にくらべると活発であったのは、このような背景があったからである。

卯三郎の女子教育に果たした功績は愛媛県に認められ、1900年に県から教育功労者として褒賞を授与された。また、娘たちを神戸女学院に入学させ、女子の身分が低かった時代に先見の明をもって女子の教育に力を注いだ。

それゆえ、中谷氏の祖母・梅代も明治の時代にあって高い教育を受けた女性であった。梅代は、神戸女学院を卒業して帰郷し、越智才治と結婚して中谷氏の父・信之氏を産んだ。才治は、今治市玉川町鈍川の出身で越智家から中谷家に養子に入った。才治は、愛媛県師範学校（現・愛媛大学）を卒業後、鈍川に戻って一時教員をしたのち、三菱の鉱業部門に入社した。入社してからというもの、兵庫の生野銀山をはじめ全国の三菱系の鉱山を渡り歩いたため、信之氏も中谷氏と同様に、幼少の頃は父親の仕事の関係で全国を転々とした。

中谷氏には3人の姉妹弟がいる。姉の昭子氏は、今治高等女学校を出て、阿部(株)に5、6年ほど勤務したのち、画家を目指して東京藝術大学工芸科に入学した。アルバイトをしながら学費を稼ぎ、苦学して卒業した。卒業後は国費留学生として2年間イタリアで修

業し、帰国してから現在に至るまで工芸をライフワークとしている。おなじ東京藝術大学を卒業した高階重紀  に師事していた関係で、今治市河野美術館では「高階重紀とその弟子たち展」とう展覧会に作品を出展している。この展覧会は、同館では恒例の展覧会となっており、昨年の2013年8月14日～18日には第23回目を迎えた。

姉も含めて、聖和女学院を卒業して幼稚園の先生をやっていた妹の和子氏と建築模型製作を仕事とする弟の浩二氏も、現在、みな東京に住んでいる。もともと中谷家は本籍が東京の田園調布にあったから、東京には縁がある。縁があると言えば、先にも触れたように、中谷家と阿部家は親戚関係にあって、一家が今治で生活していた間、母親の正子氏と姉の昭子氏、中谷氏本人が阿部(株)に出入りし、生活面で世話になった。とくに、終戦後一家が今治に引き揚げた際、母親が家族の生活を支えるうえで、その存在は大きかった。中谷氏が阿部(株)入社後、「生涯恩返し」の気持ちで会社に尽くしたのも、そのような経緯がある。

3. 岩田商事(株)の倒産と阿部(株)への入社

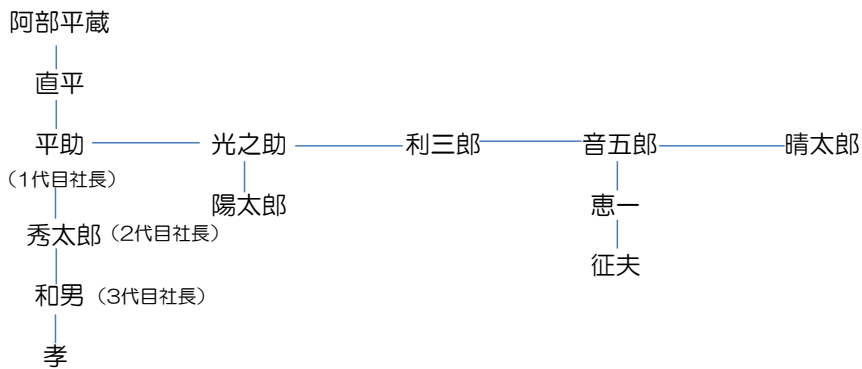
この世の中というのは、理不尽なことがまかり通るんだな

中谷氏が、岩田商事(株)と阿部(株)に入社するきっかけをつくった人が、阿部光之助の長男・陽太郎と末の間にできた娘八重子と結婚して婿養子に入り、当時大阪支店長だった大月勤氏である。「この人がわたしの人生に大きく影響した」と中谷氏が言うように、中谷氏にとって大月氏は重要な人物であり、大阪での苦学生時代や岩田商事(株)の倒産後に手を差し伸べてくれた。

岩田商事(株)は、船場八社に入る大阪の繊維問屋で、阿部(株)と取引があった。その繋がり、大月氏が高等学校を卒業したばかりの

中谷氏を岩田商事(株)に紹介し、採用試験をへて1952年4月から新入社員として入社した。同時に、大阪市立大学商学部の夜間部に通った。大学では、4年間みっちりと経営の基礎を学んだ。

図 1 阿部（株）の歴代社長




参考：「今壘」第12号、60頁および中谷稔氏のインタビューより。

実は、中谷氏の幼少の頃の夢は、医者になることであった。小学校4年生のとき、誤って自分で目の網膜を傷つけてしまい、手術をして1ヶ月ほど病院に入院したことがある。この苦い経験から医者になる夢をもった。中学生になったら、父親の影響なのか血筋なのか、モノづくりに携わりたくて工学を学びたいとおもうようになった。出身が東京だったので受験するなら東京の大学、しかも周りに東京大学出身者がいたから、漠然と東京大学を受験しようと考えていた。しかし、長男の中谷氏が大学に進学するほど家計に余裕はなかった。「先々のことを考えたら、生活しないといけないし、それだったらやっぱりどこか勤めないといけない」と考え直し、大月氏の仲介によって岩田商事(株)の採用試験を受け、働きながら通学可能な大阪市立大学で学問を修得しようとした。

岩田商事(株)の初任給は5,000円。給料で自活しながら、大学に通う日々がつづいた。大学時代の友人とは、いまでも付き合いがあり、社会人ながらも大学生の醍醐味を十分に味わえた。

岩田商事(株)でのサラリーマン生活は約2年という短いものだった

が、2つのことを学んだ。ひとつは、投機的取引である。入社後すぐに、中谷氏は三品取引所で綿糸取引の仕事を任された。会社が倒産する1954年6月まで、綿糸取引に従事し、投機的なモノの売買というものをいやというほど知った。「ある時期非常に利益がでて、結局つづかない。最終的には、みんな損をする。一発勝負の取引は儲からない」ことを痛感した。

もうひとつは、ビジネスの世界では「小の虫を殺して大の虫を助ける」ということだ。岩田商事(株)が倒産した理由は、当時、旧三井物産系の**第一通商(株)**  との取引において1億5,000万円ほどの債務を抱えていたが、第一通商(株)が旧三井物産系の他の2社と合同合併するときその債務を処理し、岩田商事(株)がそれを背負うことになったのである。「仲間取引の清算不能」のため、財務上深刻な局面に陥った岩田商事(株)だったが、銀行は多額の債務を抱えた会社を見放した。これによって、岩田商事(株)は1954年に経営破綻した。このときを振り返って中谷氏は、「この世の中というのは、こういう理不尽なことがまかり通るんだなと、いやというほど知った」と吐露している。(次号につづく)